

ぶんかざい おおた

令和5年(2023)10月 発行

大田区教育委員会 大田図書館 編集
文化財担当

〒143-0025
東京都大田区南馬込五丁目11番13号
(大田区立郷土博物館内)
TEL 03-3777-1281 FAX 03-3777-1283

目次

- ◆特集 大田区の文化財から見た関東大震災 1
- ◆御嶽神社絵馬調査報告 3
- ◆イヌ3体の埋葬遺構出土から40年 馬込貝塚 4
- ◇令和4年度事業報告 6
- ◇令和5年度催事のご案内 6

第26号

2023年
関東大震災100年

特集 大田区の文化財から見た関東大震災



写真1 大震災映死者供養塔
(本羽田3-14-7 長照寺)



図1 大正14年頃の羽田北部(写真1塔旧位置)
(『地図で見る大田区(2)』26頁所収の地形図を加工)

大正12年(1923)9月1日の午前11時58分、相模湾北西部を震源とする地震が発生し、関東地方南部周辺に甚大な被害をもたらしました。死者総数は10万人にもものぼり、直後に発生した火災により旧東京地域の4割以上が焼失したと言われます。

大田区域の大森・羽田地区等でも建物の倒壊や液状化現象が発生しましたが、全体で見れば当時はまだ農漁村の色が濃く、都市部に比べて被害は軽微なものであったと言えます(詳細は『大田区史 下巻』等を参照)。その一方で、東京湾に面した海岸には連日多数の犠牲者が漂着し、地元住民によって手厚く供養されたことが、現存する伝承碑等からうかがえます。

今号では、関東大震災から100年の節目として、区内の震災伝承碑を紹介するとともに、震災後に大きな変化を遂げた大田区*の姿を振り返ります。

*大田区政の施行は昭和22年(1947)から

区内に残る震災伝承碑

「平成 22 年度国土交通白書（国土交通省発行）」等によれば、関東大震災での死因は 9 割近くが火災によるものとされています。市中では災禍から逃れようと河川に飛び込み、命を落としてしまった方も多くいたことでしょう。そうした犠牲者が、東京湾を漂い区域内の浜辺や海苔の養殖場に流れ着いたと考えられます。大田区では、直接的な被災記録の他にも、犠牲者への供養の痕跡から関東大震災の壮絶さを学び取ることができます。以下に、震災伝承碑の一例をご紹介します。いずれも現在は日蓮宗寺院に所在しており、大本山池上本門寺（池上 1-1-1）を擁する大田区域の信仰性を示していると言えるかもしれません。

表紙写真の歿死者供養塔は、現在は長照寺（本羽田 3-14-7）に所在しますが、昭和 11 年（1936）以前は旧羽田江戸見町（現：東京モノレール「整備場」駅付近）に建てられていました（写真 1・図 1）。刻まれる日付から、震災一周忌にちなんで建てられたことがわかります。石工は「田川治郎吉」とあり、同じく長照寺境内にある明治 31 年（1898）建立の「羽田山（長照寺の山号）中興碑」に「石工 当所 田川庄次郎」と見られることから、地元羽田の石工によって手掛けられたことがわかります。境内には供養塔と同年建立の「大震災歿死者無縁塔」も現存していますが、剥落のため詳細は判然としません。

また、多摩川河口付近に所在する「五十間鼻」には、多摩川の水難事故や関東大震災、東京大空襲（1945）での犠牲者を吊った無縁仏堂が設けられ、毎年初日の出の時間には長照寺住職による供養が行われています（写真 2）。

大林寺（大森中 2-7-19）に建てられた大震災供養塔は、震災 7 回忌に際して地元の題目講（日蓮宗の教え「南無妙法蓮華経」を信奉する民間集団）である前方講（「前方」は小字名）の人々が奉納したものです（写真 3）。大林寺は震災後の遺体収容所となっており、連日大森の海岸に漂着する犠牲者の供養を務めていました。現在も毎年 9 月 1 日には震災慰霊法要が行われています。

内陸部の池上本門寺にも大震災歿死者の供養碑が建ちます（写真 4）。本所（墨田区）立正講の人々によるもので、碑の台石部には多くの名前が連なっています。震災時、本所地区にあった陸軍被服廠跡の空き地（現：墨田区横網 2-3-25 都立横網町公園）に避難した人々が、四方から迫りくる火災と強風によって発生した「火災旋風」に巻き込まれ、約 3 万 8 千人もの犠牲を出すという悲劇が起きました。当碑は建立年の明記がなく、名義上は帝都すなわち旧東京市全域の歿死者を供養するものではありませんが、本所に住んでいた本門寺信徒の震災犠牲者への思いが偲べれます。



写真 2 五十間鼻無縁仏堂（羽田 6-11 地先）



写真 3 大震災供養塔
（大森中 2-7-19 大林寺）



写真 4 帝都大震災火災歿死者之霊供養碑
（池上 1-1-1 本門寺）

*いずれの碑も見学の際は寺院へのご配慮をお願いします。

震災前後のまちづくり

渋沢栄一（1840-1931）を中心として大正7年（1918）に創立された田園都市株式会社は、同11年、つまり震災前年より洗足（目黒区）から多摩川台（現：田園調布）にかけて分譲を開始し、交通路確保のため目黒蒲田電鉄（東急の前身）を設立します。その背景には、明治末から大正にかけて増加したサラリーマンの多くが「職住分離」の生活を送っており、過密状態となった市内からほど近い地域にベッドタウン建設の需要が高まっていたという社会情勢がありました。



写真5 昭和初期の田園調布駅前
（『大田区の文化財』第19集所収）

この影響を受け、大田区域でも大森・蒲田地域に代表されるように、耕地整理事業（1916～）や土地区画整理事業（1919～）、さらに東海道線東京－横浜間の開通（1914）、東海道（現：国道15号線）の拡幅工事（1918～27）、多摩川下流域の治水工事（1918～33）等が相次いで着工しており、震災前には既に商工業地および宅地の造成基盤が形成されつつあったのです。そうした工場進出・人口流入の気運が高まっていたところに、震災は拍車をかける結果となりました。田園都市株式会社も、損害を被るどころか「今回の激震は田園都市の安全地帯たる事を証明しました（『東京朝日新聞』大正12年10月27日付）」と広告し、むしろ販売の追い風としたのです。

こうして、大正6年（1917）に約6万7千人だった区域内の人口は、昭和10年（1935）には約34万9千人に膨れ上がりました。かつて純然たる農漁村であった大田区域は、震災をきっかけにして瞬く間に「大東京市（昭和7年成立）」の一角を担う市街地へと姿を変えていったのです。

おわりにー自然災害伝承碑の情報活用ー

今回ご紹介した震災伝承碑は、国土交通省が管轄する「国土地理院地図」の自然災害伝承碑データベースに令和5年（2023）7月27日付で登録され、インターネット上でも位置情報を含めて閲覧することができます。全国の伝承碑がご覧になれますので、過去に発生した自然災害の「記録」と「記憶」を後世に伝える一助としていただければ幸いです。災害発生場所や奇跡的に助かった場所、さらにその時期や要因を網羅的に把握することで、今後の防災観点上でも非常に有効な資料となります。



自然災害伝承碑
データベース

首都直下地震の発生率が高まっている昨今、住宅地が密集状態となった現在の大田区において、大規模被災は他人事ではありません。過去の教訓を活かし、日頃から防災・減災の意識を持ち、発災時に冷静な行動ができるよう心掛けることが必要です。（田島）

おんたけ 御嶽神社絵馬調査報告

令和4年（2022）夏、教育委員会文化財担当は、江戸時代以来、「嶺の御嶽山」として関東一円の篤い信仰を集めている御嶽神社（北嶺町37-20）社殿の耐震構造調査と共に、神社に伝来した絵馬や扁額（建物の名称を示す額）計78点の調査と撮影を行いました。一週間の調査の間に、これまで知られていた嘉永4年（1851）の絵馬よりも古い、天保8年（1837）の扁額をはじめ、戦争や災害に際して奉納された作例などが発見され、江戸時代後期から現代にかけて、御嶽神社に寄せられてきた祈りの形が明らかとなってきました。

この調査成果は、全作品のオールカラー図版のほか、民俗学、美術史学の専門家による論文を収載する『御嶽神社絵馬調査報告書』（『大田区の文化財』第45集、令和5年度末刊行予定）にてお伝えする予定です。（森）



現存最古の
奉納年紀の扁額
（天保8年〔1837〕奉納）

まいそういこう
イヌ3体の埋葬遺構出土から40年 馬込貝塚

大田区は海に面し、東京都内でも貝塚の多い地域です。貝塚は貝・獣骨・魚骨・人骨・骨角器などによって形成されていることから、当時の人々の生活環境や自然環境への適応方法を知る手がかりとなり、現代の私たちが自然との共存を考える上で学ぶべき視点を与えてくれます。

今号では縄文時代の貝塚の中で都内でも類例の少ない「埋葬されたイヌ」が発見された馬込貝塚を紹介します。馬込貝塚は中馬込一丁目と上池台五丁目の一部に所在します。遺跡が立地する馬込の台地は呑川の支谷によって複雑に刻まれた地形で、痩せ尾根上に住居跡などの遺構が展開しています。これまでの調査成果から、馬込貝塚はA、B、Cの3か所の貝塚を中心に構成されていることがわかっています（図1）。貝塚からの出土土器は縄文時代前期から晩期（約5,500年前～2,900年前）までみられ、この周辺が間断なく集落などに利用されたことがわかります。

明治42年（1909）、作家の江見水蔭が『地中の秘密』に馬込貝塚などの発掘の様子を記載したことから多くの人に知られるようになりました。当時、馬込貝塚では考古学者による発掘調査は行わ

れておらず、昭和に入ると関東大震災後の急速な宅地化が影響し、馬込貝塚の破壊に拍車がかかりました。

昭和10年代には、松岡六郎を中心とする荏原中学校の生徒で組織された「鏝会」のメンバーが宅地造成工事に伴って出土する遺物の収集に努め、その一部が松岡によって紹介されました。昭和11年（1936）の発掘調査では、縄文時代中期から後期の土器片などのほか、埋葬されたイヌ1体とその1m西方から女性の人骨1体が発見されています。調査地点は松岡が指摘した「B貝塚（B地点）」にあたります（図1）。

戦後、馬込貝塚が改めて注目されたのは、馬込貝塚遺跡調査会によって昭和58年（1983）に行われた発掘調査です。この調査地点はB地点から西に100mの所に位置しています。調査では後期の竪穴住居跡3軒などとともに、イヌ3体が埋葬された後期の土坑（第1号土坑）が検出されました。

第1号土坑は直径1.1m、深さ2.1mと非常に大型で、その底面から90cm上の中層部と30cm上の下層部でまず2体のイヌが検出されました。中層部で検出された1体目は、成犬ですが若い小型の個体で右側を上にし、首から頭部は伸ばして背をやや丸め、足を折り曲げた姿勢で埋葬されていました（写真1）。2体目の下層部から出土したイヌは年齢が1才～1.5才で、うつ伏せの姿勢でできる限り小さくくるまれる（折り曲げられる）状態で埋葬されていました。また3体目は、下層部の2体目から50cmほど離れた場所の土を、調査後に土壌洗浄作業を行ったところ1個体分の骨格として発見されました。分析の結果、生後5～6週の幼犬と判明しました。

このように1基の土坑内で検出層位が異なるイヌの埋葬例を紹介しましたが、第1号土坑はイヌを埋葬するための土坑としては規模が大型であり、土坑内を埋めている土層の堆積状況から、1度埋まってから再度掘り返され使用されたようです。その再利用の際にイヌの埋葬が行われたと推測されます。

戦前の松岡報告では、宅地造成工事中の調査であったため十分な遺構の情報を得られていないことから、この第1号土坑のイヌの埋葬例は、遺構の詳細が判明した貴重な成果と言えるでしょう。（門内）

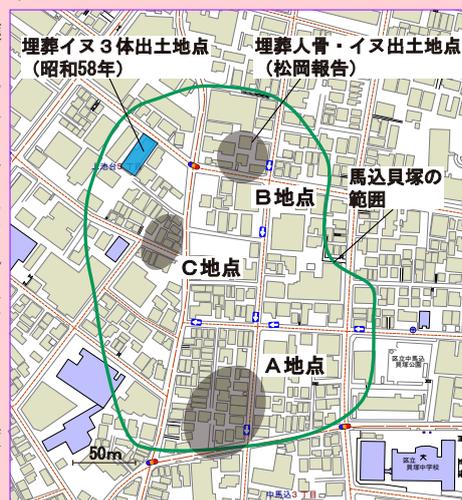


図1 馬込貝塚の各調査地点の位置



写真1 第1号土坑中層部の埋葬イヌ出土状況

縄文時代のイヌの役割

犬骨の出土事例をはじめ取り上げたのは大田区山王から品川区大井に位置する大森貝塚を調査したエドワード・シルベスター・モースで、大森貝塚の報告書の中で「人、猿、熊、鹿、狼、犬骨」の破片が出土したと記載しています。現在犬骨の出土事例は、北は北海道島、南は鹿児島県奄美群島まで幅広く分布し、そのうち埋葬事例は約80件を数えます(図2)。埋葬事例は縄文時代早期(約8,000年前)から晩期(約3,000年前)まで認められていることから、数千年の長期間にわたってイヌが人と共に生活し、大切に扱われていた様子が見えてきます。

当時のイヌは、飼うだけではなく、主に狩猟の補佐などの役割を担っていたと考えられています。その証拠として、千葉県武士遺跡などのようにイノシシやシカの骨にイヌの噛み跡が認められる事例や、時代は移りますが伝香川県出土銅鐸に鑄造された弓を射る男性とイヌのイノシシ狩りの絵画(図3)などがあります。縄文時代のイヌは弥生時代以降に大陸から伝来してきたイヌよりも小柄な、甲斐犬に近い小~中小型犬であることがDNAからわかっていますが、中には歯が損傷している事例もありますから、何回も激しい狩りに帯同されていたのでしょう。また、縄文時代にイヌを食用としていた証拠はほとんど見つかりません。

イヌの埋葬事例紹介

イヌの埋葬状況には、単体、複数個体、人と同じ土坑内などいくつかのパターンがあり、埋葬姿勢では、馬込貝塚のように、背を丸めて足を折り曲げた屈葬の姿勢で検出される事例が多く見られます。

複数個体の出土事例では、千葉県高根木戸貝塚の廃屋墓から3体のイヌが折り重なるようにして出土した埋葬事例が有名です(図4)。同廃屋墓からは人骨も出土していますが、時期差をもって後から埋葬されたことがわかっています。このような複数の個体が出土した集落事例からは、イヌが飼育されていた様子も推測出来ます。

人と共に埋葬された事例では宮城県前浜貝塚や愛知県大曲輪遺跡などが知られています。前浜貝塚は人骨と犬骨が接しており、同時に埋葬されたという説が有力です(図5)。他事例では人とイヌが時期差をもって埋葬されたものも多い中、興味深い事例です。

珍しい事例としては、竪穴建物の炉跡や柱の下の土坑から検出され、イヌが住居に関わる供犠のような祭祀に使用されたと考えられる事例も見つかっています。

これらのように、縄文時代の日本列島内においてイヌの扱いは一様ではなく、集落単位の違いがあったと考えられています。しかしイヌと人々との関係については全容がまだわかっていない事例が多く、今後の科学分析や新しい発見が待たれています。馬込貝塚は犬骨と人骨との埋葬と複数埋葬の両方を見ることが出来る興味深い事例です。今後も、馬込貝塚に次ぐ一例が大田区内で出土する可能性も残されています。(楠)

(参考文献) 山崎京美 1985「縄文文化におけるイヌの埋葬について」『國學院雑誌』86-2 國學院大學

山田康弘 1997「縄文家犬用途論」『動物考古学』8 動物考古学研究会 など

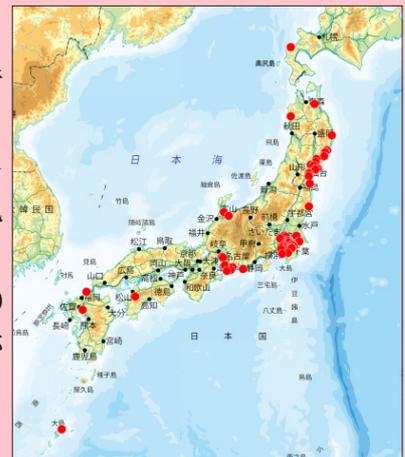


図2 全国のイヌ埋葬事例分布図
(国土地理院電子国土Webをもとに筆者加筆)

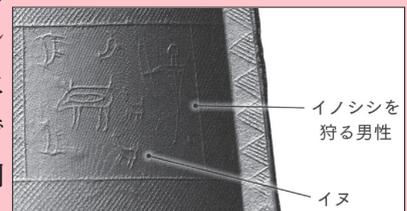


図3 イノシシ狩りの銅鐸絵画
3D画像抜粋

(九州国立博物館 2018『国宝銅鐸絵画特集展示』)

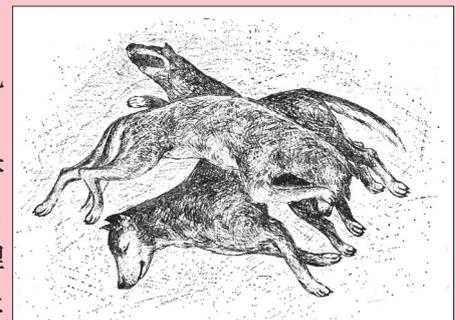


図4 高根木戸遺跡イヌ埋葬例復原
(高根木戸遺跡調査団編 1971『高根木戸』)

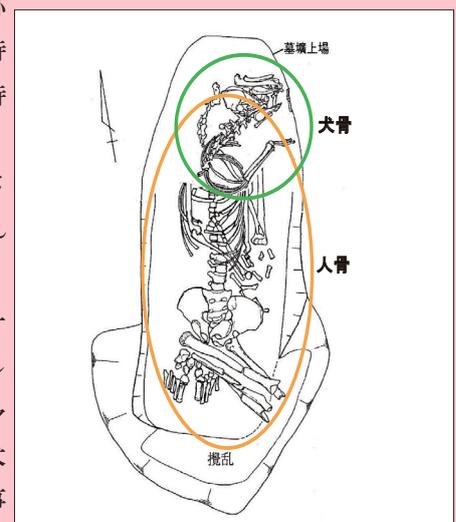


図5 前浜貝塚人骨・犬骨埋葬例
(相原淳一 2011「宮城県気仙沼市前浜貝塚土壌墓の再検討」『東北歴史博物館研究紀要』12に筆者加筆)

事業報告

令和4年度 文化財公開見学会 「法養寺の日蓮聖人像」

日蓮生誕 800年、入寂 740年の節目にちなみ、11月19日（土）、法養寺（池上1-19-25）にて文化財公開見学会「法養寺の日蓮聖人像」を開催しました。対象の日蓮聖人坐像（法養寺本尊・区指定文化財）は、この年の調査で、江戸時代前期に一流の仏師により製作され、徳川四代将軍家綱の正室高巖院が寄進したと判明しました。このほか、同寺で所蔵する「釈迦涅槃刺繍画像」などの非公開文化財も特別公開するとともに、山本勉氏（大田区文化財保護審議会委員）監修の解説資料を配布しました。（森）



公開見学会の様子

令和4年度 文化財講演会 「大型前方後円墳の築造—田園調布古墳群を中心に—」

令和4年は宝萊山古墳（田園調布4-10）の都史跡指定70周年の記念イヤーでした。そこで、現在多摩川流域の古墳を調査研究し、宝萊山古墳の平成の発掘調査にも参加した青木敬氏（國學院大學文学部教授）を招き、3月5日（日）に講演会「大型前方後円墳の築造—田園調布古墳群を中心に—」を開催しました。当時の調査の様子や宝萊山古墳をはじめとした田園調布古墳群の解説だけでなく、各地の古墳との比較検討についてもお話し頂きました。新型コロナウイルス流行後では初となる4年ぶりの開催となりました。

なお、宝萊山古墳指定関連事業として、郷土博物館では特別展「大勾玉展」が開催されました。（楠）



文化財講演会の様子

催事のご案内

東京文化財ウィーク 2023 企画事業

文化財講演会 「無形文化遺産の保存と防災」

日時：10月29日（日） 14：00～16：00 定員40名（予定）
講師：久保田裕道氏（東京文化財研究所 無形民俗文化財研究室長）
会場：大田区立郷土博物館 2階会議室
参加料：無料
申し込み：往復はがきによる事前申し込み制（10月10日必着）

文化財公開見学会 「数江家住宅」(国登録文化財)

日時：11月23日（木・祝） 定員各20名
① 10：30～11：30 ② 14：00～15：00（内容は同じ）
講師：大川三雄氏（大田区文化財保護審議会委員・元日本大学教授）
会場：数江家住宅（久が原2丁目）
参加費：1,500円
申し込み：往復はがきによる事前申し込み制（10月27日必着）

講演会・公開見学会

申し込みはがき送付先・問合せ先
*ご応募多数の場合は抽選
〒143-0025
南馬込5-11-13 郷土博物館内
大田区教育委員会文化財担当
(電話番号：03-3777-1281)



数江家住宅外観